LIXIL GALLERY

岡博大展

OKA HIROMOTO

2015年3月12日（木）～5月23日（土）

10:00 a.m.～6:00 p.m.

休館日：水曜日、4月29日、5月6日

クリエイションの未来展

第3回

隈研吾監修

ぎんざ遊映坐 — 映智をよびつぐ

制作中のドキュメンタリー映画
「建築家・隈研吾（仮）」の場面写真

日常の映智

岡博大（映画作家）

映画という大海に身を委ねて遊泳しているうちに、思いがけず今回の展覧会のお話をいただいた。

監修の建築家・隈研吾先生は、ぼくの大学時代の恩師だ。学生時代、自分の眼は節穴だということを学んだ。建築は総合芸術。そこかしこに人類の叡智が詰まっていて、物語が潜んでいる。日常の中にもアートは満ちあふれている。そのことに気づけて以来、世界が一変した。

建築と同じく映画も総合芸術。映画を通して、隈先生に恩返しをするとともに、人々の生活を豊かに潤してみたい。

三カ月限定で「ぎんざ遊映坐」という名のミニシアターを開館する。

どのような映画を、どのような場所で見るか。映画館は、観客の映画体験を大きく左右する。多様な映画を紹介する街のミニシアター文化を復興しようと、2008年、湘南遊映坐という団体を立ち上げた。

遊映坐とは「旅する映画館」の意味。普段は、湘南鎌倉の禅寺やヨットハウスなどを“遊映”して、映画やアート、地元文化に親しむ映画祭を主催している。東日本大震災の発生後は、心の復興を願って、東北被災地でも出張映画祭を開催している。このたび、銀座へも遊映することになった。

会場では、隈先生とモバイルシアターを試作・展示し、映画を上映する。将来は、竹林の草庵のように、軽やかに旅するセルフビルド（組立式）のミニシアターに成長するといい。遊映坐という新たな映画空間の可能性も体感していただきたい。

オープニング作品として、隈先生の建築プロセスを記録したドキュメンタリー映画を公開する。建築三昧の日常を追ったロードムービーだ。

続いて、東北の伝統職人「気仙大工」棟梁の藤原出穂さんや、アーティストらに密着した作品も上映予定。ものづくりの過程に焦点を当て、時代を越えて受け継ぎたい、創作の智恵や復興の智恵を探る。

新聞記者をしていた2010年9月、独学で撮影を始めた。生成りのTシャツのように、自然体で計らわない、産地直送の映画をお届けしたい。

会期中、各作品とも制作を続ける。映画の制作プロセス自体も作品として公開するドキュメンタリー・イン・プログレスの手法を取る。各作品は特報予告篇のような短篇からなり、会場で順次、続編を公開していく。

隈先生は、諸国を行脚する漂泊の俳人のようだ。

まさに日常が旅そのもの。世界を股に掛けて、数多くの建築プロジェクトの現場へ足繁く通い、その土地に根差した建築という名の句を詠んでいく。

ぼくは、芭蕉の旅に同行した門人・曾良のように伴走している。隈先生が建築で句を詠む一方、ぼくは映画で句を詠み、旅日記をつける、といった風に。

俳句のように、未完成で不完全、断片的な映画に心ひかれる。俳句は本来、俳諧連歌（連句）の発句（五七五）部分が独り立ちしたもの。余白に満ちた存在だ。

個々の隈作品を眺めると、全く異なるスタイルだが、俯瞰してみると、底流には連綿と流れる調べがあることに気づく。うぶすなの建築、よびつぐ建築、連なる建築、不易流行と、かるみ。両極の価値観も軽やかに共存している。

徐々に作品同士が連なり、連作、連歌のようにも見えてくる。建築に限らず、ジャンルの垣根を越えて相通じる普遍性＝叡智も浮き彫りになってきた。無心になって旅の記録を続けていけば、いつか「おくのほそ道」のような紀行映画が生まれるかも知れない。

小津安二郎監督ゆかりの北鎌倉の円覚寺や浄智寺で、毎年小さな映画祭を主催させていただいている。ぼくの心のお師匠さんでもある小津先生は、このような言葉を遺されている。

「永遠に通じるものこそ常に新しい」「ありふれた材料でもっといいものが作れる」

いつまでも古びず、時代と国境を越えて人々の心に響き続ける小津映画。一見すると取るに足らない、無価値とも思える日常茶飯事の中に、ひっそりと「映智」（映画で描く叡智）が潜んでいる。

月並みで小さな映画を一本一本作り続け、よびついでいくことで、後世へと継承すべき日常の映智を描けないだろうか。

旅する映画作家

隈研吾（建築家）

岡博大さんは、僕が慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス（ＳＦＣ）で一年間だけ教えていた時の学生である。その時、建築史と美術史とを統合するという野心的なレクチャーを試みた。あまりに頭を使って疲れたので、一年間しかやらなかった。それまで岡さんは、ビジネスを志していたが、このときのレクチャーを聴いて、人生の方向を180度変えたそうである。その後、新聞記者になり、映画作家に転向した。

ここ数年彼と一緒に世界を旅している。彼はどこにでも付いて来て、気づくとカメラを持って、そこに立っている。僕の旅する日常にどんな価値があるかは、自分では分からない。しかし、岡さんはそこに価値を見つけてくれて、カメラを持って付いて来て、僕の旅をムービーにおさめている。

なにしろ膨大な量である。どんな形で日の目を見るかわからないが、ここで、モバイルシアターという場所を作って、その一部を紹介する。モバイルシアターは、ここを起点にして世界を旅していけばいいと考えている。旅しやすいように細い竹でできた球を積み上げるとシアターになるように仕組みを考えた。竹も岡さんも一直線で、しかも粘り強い。

岡博大 Hiromoto Oka

映画作家　ジャーナリスト
NPO法人湘南遊映坐理事長

1971年神奈川県生まれ。1999年慶應義塾大学総合政策学部卒業後、中日新聞社入社（東京新聞記者）。2010年から映画作家としても活動開始。建築家・隈研吾をはじめ、気仙大工、アーティストらの日常の叡智を描くドキュメンタリー映画を制作している。2008年に湘南遊映坐を設立し、湘南鎌倉や東北被災地で出張映画祭を主催。芸術文化振興や復興支援活動にも力を入れる。2014年より立教大学コミュニティ福祉学部東日本大震災復興支援プロジェクト参画。

著書／映画作品

1999　井上ひさし監修・共著「ぼくらの先輩は戦争に行った」（講談社）
2007　著書「映才教育時代」（フィルムアート社）
2010〜　ドキュメンタリー映画「建築家・隈研吾（仮）」
　隈研吾の日常の創作プロセスに伴走したロードムービー。
2011〜　ドキュメンタリー映画「気仙大工（仮）」
　東北の伝統職人・気仙大工のものづくりと復興の智恵を描く。
2011〜　ドキュメンタリー映画「ありがとう」
　東北被災地の道中で発見した数多くの感謝のメッセージを連ねる。
2011〜　ドキュメンタリー映画「やっべし」
　岩手県大槌町吉里吉里のNPOの復興の歩みを追う。
2013　監修・共著「小津三昧」（遊映坐文庫）
その他、音楽家・三宅純や、舞踊家・勅使川原三郎、KOSIO RAWMANらアーティストに密着したドキュメンタリー映画を多数制作中。

展覧会

2013　隈研吾中国展2013「隙間」（上海）にてドキュメンタリー映画上映

湘南遊映坐

2008年、街のミニシアター文化を復興しようと、「旅する映画館」をコンセプトに設立した映画文化振興団体。毎年、小津安二郎監督ゆかりの北鎌倉の禅寺（円覚寺、浄智寺）などを“遊映”し、予告篇ナンバー1を決める「予告篇ZEN映画祭」を主催する。東日本大震災の発生後は、東北被災地で出張映画祭も開催。「みんなの小津会」や「えのしま遊映坐」「みなみそうま遊映坐」など、映画とアート、地元文化を融合したイベントを開く。2013年NPO法人化。

隈研吾 Kengo Kuma

建築家　東京大学教授

1954年横浜市生まれ。東京大学建築学科大学院修了。1990年、隈研吾建築都市設計事務所設立。現在、東京大学教授。1997年「森舞台/登米市伝統継承館」で日本建築学会賞受賞、その後「水/ガラス」（1995）、「石の美術館」（2000）、「馬頭広重美術館」（2000）等の作品に対し、海外からの受賞も数多い。2010年「根津美術館」で毎日芸術賞。近作に「浅草文化観光センター」（2012）、「長岡シティホールプラザ アオーレ長岡」（2012）、「歌舞伎座」（2013）、「プザンツン芸術文化センター」（2013）、「ＦＲＡＣマルセイユ」（2013）等。著書に、「負ける建築」（岩波書店）、「自然な建築」（岩波新書）、「小さな建築」（岩波書店）、「日本人はどう住まうべきか？」（養老孟司氏との共著、日経BP社）、「建築家、走る」（新潮社）、「僕の場所」（大和書房）など。

協力　隈研吾建築都市設計事務所（齊川拓未）、東京大学隈研吾研究室（Donnie Brosh）、NPO法人湘南遊映坐

LIXIL GALLERY

LIXIL GALLERY
東京都中央区京橋3-6-18 東京建物京橋ビル LIXIL：GINZA 2F　phone 03-5250-6530
制作発行：株式会社LIXIL、デザイン：SOUVENIR DESIGN INC.
url **http://www1.lixil.co.jp/gallery/**　facebook **facebook.com/LIXIL.culture**

1

2

3

4

1.2.3. 制作中のドキュメンタリー映画「気仙大工（仮）」、「音楽家・三宅純（仮）」、「舞踊家・勅使川原三郎（仮）」の場面写真　4. 旅する映画館「遊映坐」のこれまでの取り組み